The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

律蔵に見られる阿闍世

永原智行

はじめに

阿闍世は、釈尊在世中に父の頻婆娑羅王を殺害したクーデターによってマガタ国の王位を簒奪した実在の人物である。殺父は、五逆罪の一つで、無間地獄に堕ちる五無間業である。難化の三機・難治の三病人として仏になれない機であり、殺父とその罪過に苦悩する者の代表者である。三機の救済の逆謗摂取は浄土教の大テーマで、親鸞聖人（一一七三―一二六三）において集大成する。

私は、浄土教の立場で阿闍世を考察しているが、研究上当然に、浄土教以外の経典や文献で阿闍世をいかに見ているかということに関心をもった。すべての文献の記載事項にあたることは無理なので、今回は、『パーリ律』とこれに相当する漢訳の『四分律』、『五分律』、『十誦律』、『摩訶僧祇律』、『鼻奈耶』の律蔵に次の小テーマごとにあたってみる。

小テーマ

一、阿闍世の名のり。二、阿闍世と提婆達多の関係。三、提婆達多が神通力を見せて阿闍世の歓心をかい、化作をみて信順したこと。四、殺父未遂。五、頻婆娑羅の幽閉の描写。六、頻婆娑羅の譲位と自殺。七、阿闍世の子。八、その他

一　阿闍世の名のり

阿闍世の名は、Ajātaśatru または Ajātasattu である。字義は、敵対するものがないである。他に、未生怨・未生寃・善見・婆羅留枝・折指とある。未生怨・未生寃は、未だ生まれないときから父の敵であるという意味である。善見は、宮廷の外の人が長じて父を殺すであろうから未生怨と呼ぶのに対して、宮廷内の人が善見と呼んで悪心を起こさせないようにした。韋提希が阿闍世を産むときに高楼から落とした。指を一本折ったので、婆羅留枝（折指）という。

自ら Vedehiputta（ヴィテーハ族の女の息子）、「韋提希の子」

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

と母系で名のった。

『四分律』には未生怨とある。その名の由来は、王に子がなかったので、バラモンに占ってもらうと、一人の夫人が子を産むが、王の仇になると占った。知った上で、夫人は妊娠して男子を産んだ。仇となるから未生怨と名付けた。殺されても子が欲しいという王の願いがあった。『五分律』では、「瓶沙王太子名曰衆楽。」（大正蔵二二　一七頁c）と瓶沙王太子の衆楽として登場して、王位に就くと阿闍世と名のった。『十誦律』では、瓶沙王太子阿闍世王と名のっている。『十誦律』で韋提希の子として、「摩竭国主韋提希子阿闍世王。」（大正蔵二三　三頁c）や、仏の舎利の分配を申し出る者の中に「摩竭陀国主阿闍世王。韋提希子。」（大正蔵二二　四四六頁b）と名のっている。「雑事」では未生怨と名のり、勝身之子（大正蔵二四　三九九頁b）と父の名が冠せられている。

二　阿闍世と提婆達多の関係

提婆達多に唆されて頻婆娑羅を殺すのは全ての律蔵にある。

『パーリ律』『四分律』『五分律』では、殺父の事実のみが記録されているだけである。『五分律』にある殺父の理由は、「如是少時乃以無事而害父命」（大正蔵二二　一九頁b）と父の存命による不安を示唆している。殺父はその事実の記録程度であり、その深層にある苦悩など記していない。提婆達多の教唆は、父王を殺して王になることを勧め、自分は新しい仏になるという。

三　提婆達多が神通力を見せて阿闍世の歓心をかい、化作をみて信順したこと

提婆達多の神通力については、『パーリ律』『四分律』『五分律』などでは、神通力を示して歓心を得た。神通力を教えた人の名はない。『増一阿含経』では、修羅陀から神通を学び、神足通を得た。『毘奈邪』や「破僧事」では、釈尊・舎利弗・目連に拒否されて十力迦葉に教わり、『鼻奈耶』では阿難に教わった。釈尊は提婆達多に悪心を見抜き、十力迦葉と阿難の違いはあるが、その二人は見抜く眼力がない。

化作をみて信順したことは全ての律にある。

『五分律』では童子の姿となって、床上の仰向けになっている阿闍世の指を吸った。神通力で自在に変身にするのに驚き、提婆達多に車五百台分の美食を供養している。『十誦律』では、神通力で象宝と化して門でないところから入って門から出て、門から入って門でないところから出たり、馬宝となって同様にしたり、童子となって膝の上にのって、抱擁され、接吻されるとその唾を啜って心を引いて、信頼を得て多く供養された。変身した物は律蔵によって異なるが、象→馬→（比丘）→小児のパターンは変わりなく、接吻されその唾を飲むのも同じである。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

四　殺父未遂

最初、父王の殺害は失敗している。『パーリ律』には、阿闍世は利剣を帯びて後宮に入るのを大臣に見咎められる。『四分律』では、密かに刀を帯びて後宮に入って父を殺そうとするが、守門者に見つかる。未遂事件が発覚し、その首謀者は提婆達多だと答える。『十誦律』では利剣を王の馬車に投げつけて、失敗して逃亡する。「破僧事」では、王が竹林にいる釈尊に粥をとどけるのを、待ち伏せて刺そうとしたが失敗して、粥の容器を残して逃げる。

五　頻婆娑羅の幽閉の描写

王の幽閉について『十誦律』と「破僧事」と『鼻奈耶』に詳説されている。①幽閉の原因、②王宮の後援、③頻婆娑羅が会った人、④阿闍世の妨害、⑤釈尊が派遣した仏弟子についてそれぞれ検討してみる。

『十誦律』①一国に二人の王がいる状態になり、提婆達多が再び王を殺せと唆した。②人・夫人が差し入れた。大夫人が、食べ物を衣に塗り、上着で隠し、獄中で服を脱いで王に食べさせた。③釈尊や舎利弗や目連。④外を見えなくさせるが、釈尊が王舎城に入城すると、さまざまな奇瑞が起こり、このことで父王は仏の入城を知って、隙間から仏を見て、王は聖道を得た。このことを知った阿闍世は、王の脚の底を剣で削ったために王は衰弱した。⑤該当なし。

「破僧事」①阿闍世を誹謗したから死罪として幽閉した。②韋提希が食料を運ぶ。③窓から釈尊を見て命ながらえる。④窓から見えなくさせて、足を削らせる。⑤釈尊は目連を派遣する。

『鼻奈耶』①釈尊に怒った提婆達多は、阿闍世の所に行って、阿闍世は王を殺して新王となり、自分は釈尊を殺して新仏となろうと唆す。②家臣や夫人達が食料を運んだ。第一夫人が食料を衣裳に塗り、さらに上着で隠して王に差し入れた。③釈尊や舎利弗や目連などが耆闍崛山を上り下りするのを見て喜んだ。④耆闍崛山が見えないように障害物を築いた。釈尊が王舎城に入城すると、城内はさまざまな奇瑞がおこった。入城を知った王は、獄の穴より釈尊を垣間見て、得道し、命ながら得た。このことを知って、王の足の裏を剣で削り皮をはいだ。王は衰弱した。⑤該当なし。

また、『観経』と「破僧事」では、父王の幽閉が似て非なる描写がある。『観経』は、「酥蜜をもつて麨に和してもつてその身に塗り、もろもろの瓔珞のなかに蒲桃の漿を盛れて、ひそかにもつて王にたてまつる。」（真聖全一　四八頁）と、瓔珞に蒲桃の漿を入れて運ぶが、他の律蔵にない。「破僧事」で大夫人韋提希が食事を運んだ。他の律蔵では名のりがない。守門人から聞いた阿闍世は、食事を運ぶことを禁じた。そこで酥蜜を身に塗って、脚の飾りに水を入れて運んだ。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

六　頻婆娑羅の譲位と自殺

頻婆娑羅が阿闍世に譲位したことは、『パーリ律』・『五分律』・『鼻奈耶』にある。

『パーリ律』で頻婆娑羅は、阿闍世が王位を欲しているのを知って、譲位した。『五分律』では、大臣達が太子に譲位するように進言したため退位した。『十誦律』では阿闍世に譲位はしないが王と同じに待遇にしたにもかかわらず牢獄に入れられた。父王の自殺は、『十誦律』・『根本説一切有部律』・『鼻奈耶』にある。

七　阿闍世の子

子どもついては、『摩訶僧祇律』・『十誦律』・『根本説一切有部律』・『鼻奈耶』にある。『十誦律』で優陀耶跋陀は、狗と一緒に食事を摂ると言った。阿闍世が幼いときに手の指に腫れ物ができて、痛みで眠られなかったとき、父王はこれを口に含んで、暖めて痛みをとって、膿まで飲んだ。

膿を父王が吸い飲み込んだことに自分は愛育されていたこと思い起こし、殺父の非道を想到した。父を助けようとしたが、その騒動で父王は自殺した。のちに阿闍世もまた子に殺される。王舎城の悲劇の真の実態をあらわしている。

八　その他

サンガへの援助は、『摩訶僧祇律』・『十誦律』・『根本説一切有部律』にある。第一結集については、『摩訶僧祇律』・『十誦律』にある。仏舎利の分配については、『根本説一切有部律』にある。大迦葉・阿難陀の涅槃に関わることは、『根本説一切有部律』にある。『パーリ律』・『四分律』・『五分律』・『摩訶僧祇律』では韋提希が登場しない。名のらずに具体的に描かれているのは、『十誦律』・『鼻奈耶』である。名のり具体的に登場するのは、『根本説一切有部律』である。

まとめ

苦悩者の阿闍世とはまったく違う阿闍世に出会った。

『十誦律』と『鼻奈耶』は王舎城の悲劇を発展させたと考えられ、『根本説一切有部律』に継承されたと考えられる。ただ、『摩訶僧祇律』は王舎城の悲劇に提婆達多が関わっていない。律蔵での王舎城の悲劇は、阿闍世の人生の一面に過ぎない。父を殺した悪王としてあるに過ぎず、事件は釈尊在世の歴史上の一事件に過ぎない。『大般涅槃経』のような苦悩者として描かれていない。しかし、律蔵に逆謗の救済の原点を見ることができる。

〈キーワード〉　阿闍世、未生怨、律蔵

（浄土真宗本願寺派和歌山教区日高組教専寺住職）

NII-Electronic Library Service